異世界コンビニ繁盛記～そのバナナ胸の谷間で温めましょうか？～

鳥居なごむ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

異世界コンビニ繁盛記～そのバナナ胸の谷間で温めましょうか？～

【Ｎコード】

Ｎ０２６３Ｙ

【作者名】

鳥居なごむ

【あらすじ】

ある日、突然、バイト先のコンビニもろとも異世界に飛ばされた逢坂仁。ほかのクルーたちと協力して異世界でコンビニを繁盛させる話です。四コマ漫画を読むような気軽さでお楽しみください。

第一幕　ある日の出来事

話をしよう。

例えば無人島になにか一つだけ持っていけると聞かれた場合、僕は「女の子（ただし美少女に限る）」と即答したいのだが、実際問題そんな勇敢さは変態扱いされて一巻の終わりである。つまり言いたいことも言えない世の中なわけで、僕は妥協に妥協を重ねた回答を質問者へ返すのだった。

「話し相手――ですかね」

「そっちかあ。読み違えたわ」

巫条さんあいたたという風に額へ手を当てながら謎の発言をする。見た目は綺麗なＯＬさんといった感じなのだが、中身は完全なセクハラ親父という残念な副店長だ。ちなみに名前は巫条葵、年齢は二十代半ばくらい。コンビニの夜勤シフトで週二回ほど顔を合わせているだが、さすがにこちらから女性の歳は聞けないので詳細不明のままである。

「どういうことですか？」

「いやあ、逢坂なら高級ラブドールを選ぶと思ってさ」

ほら、残念な人だろ？　折角の美貌を微塵も活かさない女性なのだ。

「修正するからちょっと待ってな」

そんなことを言いながら巫条さんはタブレット型端末を操作する。発注をするための機械なのだが、これまた正式名称は知らない。僕

は嘆息を漏らしつつ疑問符を投げかけた。

「入力ミスですか？」

「いや、誕生日の近いクルーにそれとなく無人島の質問をして調査してるんだ。欲しい物を直接聞くより深層心理が知れて面白いからさ」

「ん？　ちょっと待ってください。それって選んだ物をプレゼントしてくれるってことですか？」

「まあ、その予定だ」

巫条さんは思いのほかあっさりと肯定する。僕としては三つの重大な突っ込みを行わなければならないだろう。

「僕の回答を高級ラブドールと決め打ちしたんですか！　あと話し相手とかどうするんですか！　というか高級ラブドールってコンビニで発注できるんですか！？」

「その一、決め打ちしてた」

まず副店長は左手の人差し指を立てた。次いで中指も立てる。

「その二、話し相手は私だ」

最後に薬指を加えて巫条さんは告げた。

「その三、コンビニで買えないものは愛だけだ」

「そんなキメ顔で言わないでください！　大して上手くもないですから！」

僕の突っ込みに副店長は腹を立てるわけでもなく同意する。

「私も上手いとは思ってないからな。ただ一度言っていたい台詞みたいなのあるだろ？」
「例えば『俺の屍を越えて行け』みたいな？」
「まあ、逢坂の絶望的なセンスはともかくそういうことだな。私なんて『前の車を追ってくれ』と言うためにタクシーに飛び乗って休日と十万円を無駄したことがある」
「ある意味で人生、終わってますね」

とまあ。

こんな馬鹿話をバイト先のコンビニでしていたわけである。時刻は夜勤帯の終盤。あと十数分もすれば朝勤の女子がやってくる時間だ。少なくともこのときはまだ、いつもと変わらない平穏な日常を疑いもしなかった。

午前五時五十分。
自動ドアが開いて、三人の女子が入ってくる。

「おはようございます～」
「おはよーっす」
「おはようございます」

三者三様の挨拶を済ませてバックルームへ向かっていく。それから少し経ってメタボを画に描いたような店長が自動ドアを抜けてくる。

そのときだった。
地鳴りのような鈍い音と激しい揺れが起こる。そんな中、僕は声を大にして叫んだ。

「一話目からオチがない！」

第二幕　そして異世界へ

「なあおい、外の様子が変だぞ」

外に最も近いメタボ店長が不安げに言葉を絞り出した。その声に釣られて僕は外界を見やる。アスファルトで舗装された道路は土が剥き出しの地面と化し、見渡す限り顔を上げなければならないような高い建物は存在しない。もっと端的に表現すればゲームにおけるファンタジー世界の風景が広がっているのだった。

「な……なにが起こったんですか？」

ふらふらと自動ドアへ向かう僕を巫条さんが引き止める。振り返るとガスマスク付きの防護服に身を包んだ謎の人物がそこにいた。

「待ちなさい。外が地球と同じ環境とは限らないのよ」

突っ込みどころが多過ぎて逆に突っ込めない状況で正論を語られる。

「……というかその装備どこから出してきたんですか？」

「こんなこともあろうかと発注しておいたのよ」

「……」

返す言葉が出て来なかった。

「ちょっと舞ってなさい」

「この状況で踊らなきゃ駄目ですか？」

「失礼。待ってなさいと間違えたのよ」

空気が死ぬような寒い言葉遊びを終えると、巫条さんは子機のような物体を持って外へ向かう。しばらくすると防護服を脱いでガスマスクを外した。おそらくなにかしらの測定で問題なしという結果が出たのだろう。店内へ戻る途中で話しかけてきた店長が鬱陶しかったのか、笑顔で相槌を打ちながら鈍器のようなもので殴り倒していた。

「有害な物質は確認されなかったわ。それに――」

言いながら巫条さんは天井を見上げた。その後に店内を見回し始める。

「逢坂、水が出るか確認してくれないか？」

指示に従って僕はレジの後ろにある洗い場の蛇口を捻った。当然のように水が流れ始める。緊急時用の貯水タンクなんてないだろうから、これは純粋に水道が生きていることを示していた。

「電気や水といったライフラインは生きているわけだな」

「一体どういうことなんでしょうか？」

「さあ、それがわかったら苦労はないだろ」

そう告げて副店長は防護服を抱えたまま肩をすくめた。その後ろでは自動ドアにギロチン状態で首を挟まれたメタボ店長が何度も何度も入店時の「ピロピロピロピローン」という音を奏でている。かなり凄惨な光景なのだが、どういうわけか笑いが込み上げてくる。しかしこのまま放置するわけにもいかないので、僕は何食わぬ顔をしている巫条さんに疑問符を投げかけた。

「今コンビニが元の世界に戻ったら店長の首だけ異世界に残るんですかね？」
「ああ――それは可哀想ね。ちゃんと全部外へ出しておきましょう」
言うが早いか店長の身体を外へ追い出そうとする副店長だった。
「優しさが間違ってる！」

第三幕　武器

「コンビニの武器と言えばカラーボールっすよね」

朝勤の宮原明日美が満面の笑みを浮かべて微笑む。長い黒髪を左右で縛ったツインテールと豊満な胸が特徴的な元気印娘である。元から朝に客足の多い店だったのだが、この子を雇ってからさらに増えたことは言うまでもない。コンビニが異世界へ飛ばされたと知ったときも、なんとも朗らかな表情で「なんとかなるっすよ」とムードメーカーになっていた。これはもう純心とか天然なんじゃなくて、ただ単に馬鹿なんじゃないかと疑い始めたのは内緒である。

「うーん、あんまり強力な武器とは言えないよ？」

「そんなことないっすよ。時速百六十キロで正確に眉間を捉えれば計り知れないダメージを与えれるはずっす」

明日美はカラーボールを投げる素振りを見せながら力説する。

「うん、時速百六十キロを出せる剛腕と正確に眉間を捉えられる制球力があったらコンビニでバイトしてないけどね」

「どうしてっすか？」

きょとんとした表情を浮かべる少女。だから僕はできるだけ正確に真実を伝えておく。

「そんなすごい奴がいたら高野連が放っておかないだろうからね」

「先輩は物知りっすね」

そんな穏やかなを会話を楽しんでいると、巫条さんが下卑た笑み

を口許に湛えながら近付いている。どうやら癒しの時間は終了らしい。明日美は副店長の顔を確認すると丁寧に一礼していた。

「朝一から伏せ字トークは感心しないな」

「僕らのトークに伏せ字が必要な箇所は一つもありませんよ。むしろ巫条さんの存在そのものを伏せておいてください」

「……年下の男子に辛く当たられるプレイも悪くはないな」

そんな分析を真顔で行う巫条さんだった。明日美は意味がわからないのか頭の上に疑問符を浮かべている。

「冗談はともかく、異世界での自己防衛手段は無視できないな」

「そうなんすよ、どうしてコンビニは武器を取り扱ってないんすか？」

「たぶん『もしコンビニが異世界に飛ばされたら』という状況を想定してないからじゃないかな？　あと刀や銃火器の売買は法律で禁じられているからかもしれないね」

僕は明日美の自尊心を傷付けないように正論を述べておく。

「まあ、異世界と言えばチート能力が基本。主人公が最強という安心仕様なわけだな」

「それ……かなり偏った世界の常識な気がしますけどね」

「とりあえず十円玉とか指で弾いてみろよ。超電磁誘導とか起こるかもしれないからな」

「先輩ならできるっすよ」

明日美が熱い眼差しを向けてくる。仕方なく僕はレジから十円玉を取り出した。親指を強く引き上げれば十円玉を前方へ弾き出せるように構える。

「行きますよ？」
「うむ」
巫条さんの首肯を合図に僕は十円玉を全力で弾いた。次の瞬間、超加速した銅の塊はまるで弾丸の如く自動ドアを突き破り彼方へと消えていく――なんてことは当然起こらない。しょぼい軌道で数メートル飛んだあと、大理石の床に落下して甲高い音を奏でるだけだった。転がる十円玉を明日美が無言で拾ってレジへ戻す。このとき僕は空気が死んでいる状態を初めて肌で感じた。
「これが現実だ」
「知ってました」と僕は無気力に返しておく。

第四幕　心配なんです

ある日の夜。
路地裏にあるゴミ捨て場での出来事。

「怖くないよ、ほら、こっちおいで」

その場に座り込んでいるのは少女だった。ちちちと音を立てながら暗闇に向かって手招きをしている。ふわふわ髪で可愛らしい声を出す少女に僕は見覚えがあった。

「あれ、こんなところでなにをやってるんですか？」
「あ、逢坂くんだ」

振り向いた少女――八田杏奈は嬉しそうに微笑む。どの角度から見ても膨らみが確認できる素晴らしい巨乳の持ち主なのだが、今回のように真上から見下ろすと胸元の谷間が豪（えら）いことになっているので視線を逸らした。動揺を隠すために繰り返し質問を投げかける。

「あの、ここでなにを？」
「あそこにいる黒猫さんに餌をあげようと思ったんです。それなのに怖がっているのか呼びかけても近寄って来ないんですよ。もう十五分くらい呼んでるんだけどなあ」

そう言って杏奈は暗闇の一点を指差した。示された暗がりを目を凝らして確認する。確かに室外機の上に黒色と判別できる物体があった。大きさ的にも猫と同じくらいである。しかしそれはどこをどう見ても自転車のサドルだった。

「八田さん、あれは黒猫じゃなくて自転車のサドルです」

自尊心を傷付けることなく残酷な真実を伝える方法など存在しないだろう。だから僕は心を鬼にして杏奈の無為な時間に終止符を打つ。恥ずかしい勘違いを携帯の動画に収めて、ちょっとした弱みを握っておこうなんて考えもしない。

「え？」

大きな瞳をぱちくりとさせて、杏奈は暗がりの方へ近付いていく。そして自転車のサドルを軽く撫でた。もしここで少女が自転車のサドルを黒猫だと言い張ったら、僕はこれまで培ってきた価値観を捨ててでも自転車のサドルを黒猫と認めていただろう。

しかしである。

「恥ずかしい……皆には内緒ですよ？」

振り返りながら杏奈は左手の人差し指を唇に添えて恥ずかしそうに照れ笑う。その姿は天使そのものだった。

「――という出来事が先週あったんですよ」

「異世界に飛ばされる前の話だな。それがどうかしたのか？」

聞き手の巫条さんが先を促してくる。だから僕は正直な気持ちを吐露した。

「八田さん、ぽやんとしたところがあるから心配なんです」

「まあ確かに、異世界の住民が友好的とは限らないからな」
「髪型をポニーテールにされたり黒と赤の格子柄ミニスカートに黒のニーソックスを合わせられたり胸を強調することしか考えていないような破廉恥な服を着せられたり赤縁の眼鏡をかけられたり女豹のような姿勢を取らされたりしないか心配なんです！」
「私はそんな心配をする逢坂のほうが心配だけどな」

第五幕　メタボリック店長

「いや、だから異世界に飛ばされたんですって！　外の景色が中世の諸外国みたいなことになってるんですよ！　えっ……いい医者を紹介してやるから本部に来い？　だから行きたくても行けないって言ってんじゃないですか！　午前六時からの売上が百二十円しかない？　そりゃそうでしょう！　俺が缶珈琲を購入しただけですからね！　えっ……こっちでの売上が認識されるなら問題ない？　異世界支店として頑張れ？　気楽なこと言ってんじゃねーぞ馬鹿野郎！」

本部へ連絡を入れたメタボ店長は受話器越しに怒鳴り散らしている。しかしなんというか、本部の対応もわからなくはない。いきなり「異世界に飛ばされました」なんて連絡を受けたら、非暴力主義の偉人だって助走をつけて殴りかかってくるだろう。

「ん……綺麗なエルフのお姉さんが働いている風俗店があるかもしれない？　ふむふむ……幻獣の世界には美貌の女が多いんですね？　わかりました。まずは異世界の環境を把握し、この地域に密着した店作りを心がけます」

電話を切った店長は休憩中の俺に告げる。

「異世界の環境を調査してくる」

「ちょっと待ってください！　元の世界へ戻る方向で頑張りましょうよ！」

「逢坂、たとえ異世界へ飛ばされても仕事は仕事だ」

「風俗行く直前のにやけた顔で言われても説得力ありませんって！」

「馬鹿野郎！　綺麗なエルフのお姉ちゃんと『にゃんにゃん』する機会なんてこれを逃したら一生ないかもしれないだろーが！」

仕事では一切見せない苛烈な迫力があった。
刹那、店長は背後から忍び寄った巫条さんにスタンガンを押し付けられる。

「ぐあっ！」

短い悲鳴を上げてメタボ店長は床に倒れた。次いで副店長はその巨体を引き摺って用具室の中へ押し込む。最後に外から南京錠をかけて完全隔離に成功した。

「二週間くらい反省させておこう。そうすれば少しは大人しくなるだろ」
「いやいやいや、それもう大きな古時計状態になりますから！」
「ん？」

巫条さんは一瞬だけ首を傾げてから閃いたように手を打つ。

「逢坂、休憩終わったらオリコンの片付けだからな」
「感想なしかよ！」

そんなわけで閑話休題。
バックルームから店舗へ戻ると積み上げられたダンボールと十箱くらいのオリコンが視界に入った。ちなみにオリコンというのは様々な雑貨や日用品が詰め込まれた折り畳み可能なプラスチック製の箱である。

察しのいい読者諸兄は理解してくれることだろう。
俺は一呼吸置いてから副店長の名を呼んだ。

「巫条さん、元の世界へ戻れるかもしれません！」

第六幕　篠田さん

「逢坂、どうかしたのか？」

僕の声が思いのほか大きかった所為か、巫条さんだけではなく、ほかのクルーにまで注目されてしまった。

「このダンボールやオリコンですよ！　一体どこから運ばれてきたんですか！」

「本部に発注した商品が時間通りに届くのはいつものことだろう？」

「いや、だからこそ今の普通じゃない状況では考えられないことですよね！　ライフラインが丸々生きていて、どこからともなく商品が届くんですよ！」

「それが元の世界に戻る方法に繋がると？」

僕は静かに首肯する。それからほかのクルーに同意を求めた。

「皆も早く元の世界に戻りたくないんですか？　宮下さん、八田さん、あともう一人――」

店内を見回すとオリコンの商品を棚に並べ始めている少女の姿があった。朝勤クルーに詳しいわけではないのだが、ぱっと見た感じは地味で大人しそうな女子である。

「逢坂、篠田に話しかけてはいけないぞ」

「どうしてですか？」

「篠田はモブキャラだからな。ほら『ＷＯＲＫＩＮＧ』にもいるだろ？　唯一の眼鏡っ娘なのに本編に絡んで来ない奴」

「それはあの小学生時代に友人から弁当に入れられてた『くさや』

を変と言われたことをきっかけに普通に憧れるようになった、長い黒髪の横がちょっと巻き毛になっている赤い下縁眼鏡をかけている松本麻耶のことですか！」

とんでもない長広舌突っ込みになってしまった。

「さすがは逢坂だな。おかげで『ＷＯＲＫＩＮＧ』を知らない人にも人物像が伝わった」

「というか四人しかいないクルーの一人がモブキャラ！？」

「ちなみに逢坂も突っ込み専用のモブキャラだぞ」

「僕が語らなければ放送事故みたいな状況になりますよ！」

「放送事故にならないよう逢坂の全身にモザイクを入れてやるから安心しろ」

「酷い仕打ちだ！」

というか意味がわからない。しかしここで巫条さんは神妙な表情に戻った。

「そもそもなんで元の世界に戻りたいんだ？」

「そりゃあ、突然知らない世界に飛ばされたら元の世界に帰ろうとするのが普通じゃないですか？」

「それは元の世界で頑張っていた人間が口にする言葉だ。ろくな努力もしないで大した結果も出していない。逢坂がいなくなったところで元の世界の経済損失は零に等しいだろう。そんな状況から抜け出す機会を得ているんだぞ？　異世界で巻き返してやろうくらいの意気込みはないのか？」

すげえ正論だった。

「……ごめんとしか言えないじゃないですか？」

「先輩、私も一緒に頑張るっすよ！」

ダンボール箱を掲げながら明日美は気合いを口にする。傍らに立つ杏奈も愛らしい笑みを浮かべて相槌を打っていた。そんな中で篠田さんだけが黙々とオリコンの商品を棚に並べている。そして巫条さんは静かに携帯の電話口に告げた。

「ええ、そんなわけで異世界支店の話はクルー全員一致でお引き受けします」

第七幕　言葉の壁

商品の陳列を終えて、少し時間を持て余し始める。

「お客さん、来ないですね」

「現代社会のように二十四時間戦わないといけない世界じゃないのかもしれませんね」

不安そうに外を眺める杏奈に僕は一つの可能性を示唆した。しかし噂をすれば影とはこの事を言うのだろう。自動ドアが開いて金髪碧眼の青年が入店してきた。軽装な鎧姿で中世時代の騎士を連想させる。長身痩躯で腰の辺りに鞘に収められた剣を提げていた。

「僕の後ろに隠れてください」

言うが早いか僕は八田さんと宮原さんの前に躍り出る。

「この命に代えても八田（おっぱい）さんと宮原（ふともも）さんには指一本触れさせません！」

「先輩、格好いいっす！」

明日美は無邪気に喜んでくれたが、杏奈は恥ずかしそうに両腕で胸元を隠した。超可愛い。しかしここで僕は犯してしまった重大な失態を把握する。

「違うんです、おっぱ（はった）いさん！」

うわ、今度はルビじゃなく本文がおかしい！

「僕はただ穢れなき変態な気持ちで二人を守りたいだけなんです！」

もう駄目だ。取り繕うとすればするほど深みに嵌まる。

「そんなに慌てなくても大丈夫っす。襲撃するつもりなら、もう暴れているっすよ」

異世界人の来訪に戸惑っているわけではなかったが、僕は明日美のフォローのおかげで一命を取り留めた。実際、青年に暴動を起こすような素振りは見えない。きょろきょろと店内を見回しながら商品を物色しているだけだ。杏奈の意識も再び来客へ向けられる。

「あ、また一人お客さんが来ました」

今度は白銀髪の幼い少女だった。とてとてとこちらへ歩み寄りながら微笑みかけてくる。

「ペラペラペラ、ペラペーラ？」

「うわ、にこやかに話しかけられてもこの世界の言葉なんてわからない」

「ど、どうしましょう？」

僕が視線を向けると杏奈は困惑した仕種。しかし明日美は胸を張って宣言する。

「私に任せるっす」

それから白銀髪の少女と目の高さが合うように座り込んで話しかけた。

「ペラペラ、ペラペーラ？」
「ペラペラペラ、ペペラペラ」

嬉しそうに反応する白銀髪の少女。明日美はオーバーリアクションを取りながら語を継ぎ足した。

「オー、ペラペーラペラペーラ？」
「ペペラペラペラペペラペラ」
「ペラッペラ、ペペロンペーラ」

そこで白銀髪の少女と明日美はハイタッチを交わした。どうやら要望に応えられたらしい。白銀髪の少女は明日美に手を振りながら店を出ていく。

「宮原さん、すごいです！　異世界の言葉が話せたんですね」
「正直、僕も感動した」

きょとんとする明日美さん。

「いや、とりあえずペラペラ言ってみただけっすよ」
「……なんという叙述トリック」

僕の感動を返せ。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0263y/

異世界コンビニ繁盛記～そのバナナ胸の谷間で温めましょうか？～

2011年11月8日22時11分発行